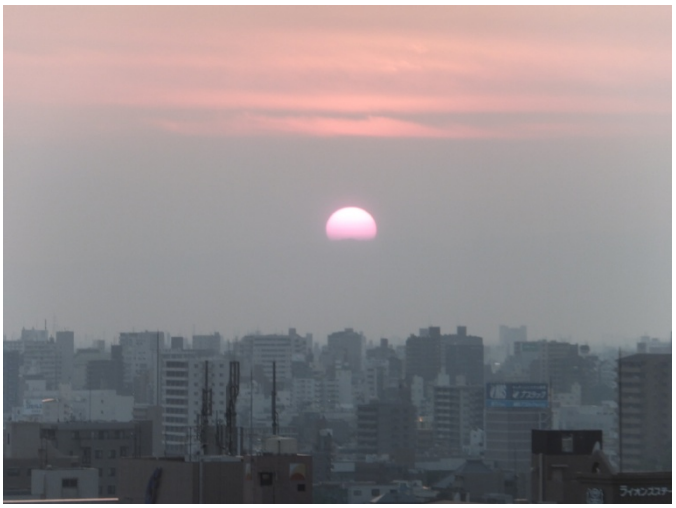
石川さんの思い出（3）

私の手帳メモによると、石川さんは昨年 6 月 27 日に市大病院に入院した。2 日後の土曜夕方に病室に見舞いに行った。その後も大学の帰りに、病室に何回か病室に寄った。いつもベッドにパソコンをおいて作業していた。重たい本がベッド横の椅子に積まれ、それを窓際に片付けて座った。

今でも忘れられないのが、最初の頃、何がほしいかと聞いたら、コーヒーが飲みたいと言った。すぐに缶コーヒーを買いに出かけようとすると、自分は缶コーヒーを飲まない、本格的なコーヒーが飲みたいと言う。慣れないのと、面倒くさいので「いやだ」と言った。頑固な石川さんを思い出すとともに、心に余裕のなかった自分を恥じる。

じつは昨年のお盆の頃に、私も市大病院眼科に入院した。「黄斑上膜」の手術をして、１週間の入院生活を送った。幼い頃は病気続きで、いつまで生きられるかという病弱の身であったが、成人してからの入院は初めてであった。手術は名医のおかげで、短時間に無事に終わったが、術後の検査など「病院生活」をゆっくり味わった。とりわけ看護師さんたちの懸命に働く姿をみて、退院後にお礼の手紙を書いた。

病室は西向きで夏の日差しが強く、昼間はカーテンで遮ったが、夕方になると名駅方面に見える夕日が美しかった。写真は 10 階の病室から撮った自慢の一枚である。



石川さんより、自分の入院の「思い出」になってしまった。じつは私の入院について、石川さんには伝えなかった。いろいろと考えることもあり、つい言いそびれてしまった。私の病室の１階上にいる彼のことを考えながら、退屈な入院生活を送った。

目の病気ということもあり、病室にパソコンを持ち込まなかったので、とにかく時間を持て余した。眼帯がとれてからは、何冊かの本をあっというまに読んだ。とにかく時間だけはあるので、本を読むしかない。一冊の難解な古典を何回も読んだが、やはり難解であった。

石川さんが難解な本をベッドの片隅においていた気持ちが、入院生活を経験してから理解できた。退院してから、なにげなく彼を見舞いに行くと、病室が暑いのか廊下で本を読んでいたこともあった。そして、8 月末に彼のゼミの今後のことで病室を訪ねると、つい口論になってしまった。

この顛末については、次のレポートにしよう。

（2014 年 8 月 6 日）